

9/26(土)、千里山キャンパスにて、本研究科主催の  
「日本語教育学フォーラム-関西からスタートする日本語研究・日本語教育-」  
を開催しました。

竹内理研究科科長の開会の挨拶で始まった第一部では、まず、本研究科のアンドリュー・バーク先生による「Why Japanese, Why?—外国人から見た日本語—」で、日本語のスタイルの「常体」と「敬体」の切り替えについて新しい枠組が提示され、同じく本研究科の嶋津百代先生の「日本語教育における「ノンネイティブ」話者・教師・学習者の考察」では、従来の「ネイティブ教師の役割・ノンネイティブ教師の役割」などに関する議論を超える視点が提示され、日本語・日本語教育学研究の新しい研究動向を感じることができました。

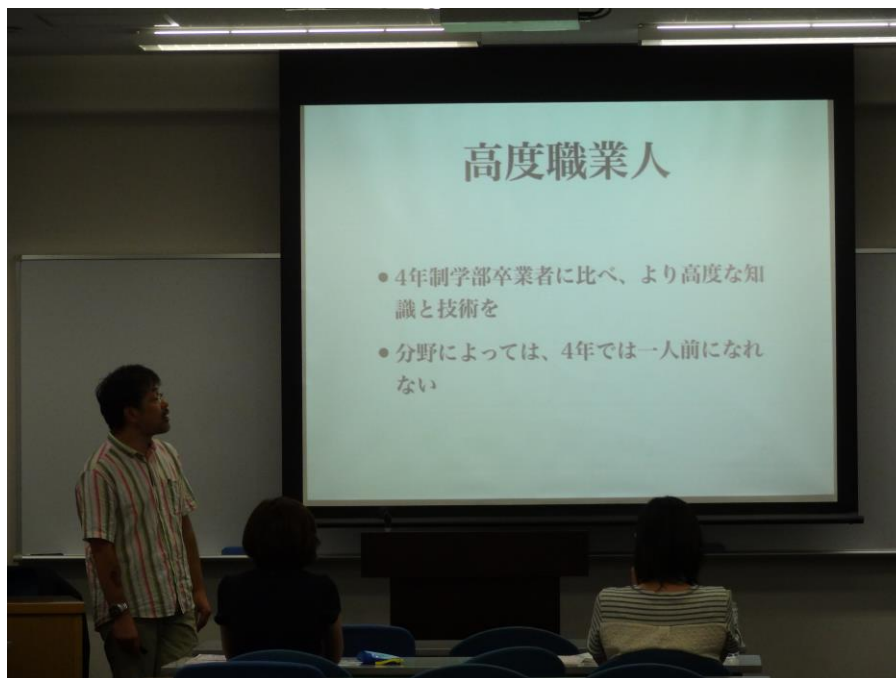




招聘講師の横溝紳一郎先生(西南女学院大学)による「日本語教師の成長を支えるものとは?—ある教師の変容プロセスをもとに—」は、横溝先生自身の経験や体験談を交えた大変興味深いお話でした。教育実践の中にしっかりと教授理論が根付いているのが窺えました。また、講演後に横溝先生と直接交流ができる時間と場所を設けたことも、参加者の方々には大好評でした。



第二部では、本研究科への進学希望者を対象に、研究科教員が説明会を行いました。また、同時に、本研究科在籍生に対して、教員から「エモリー大学ティーチングフェローシップ(米国・エモリー大学で日本語を教える仕事をしながら、同大で学べるフェローシップ)」「日本語教師になりたい人のためのワークショップ」の紹介が行われました。このように、正規課程以外にも様々なプログラムが用意されているのも本研究科の特徴です。



こうして、秋学期開始直後の土曜日にもかかわらず、多くの方に足を運んでいただき、「日本語教育学フォーラム」は大盛況のうちに終了しました。本研究科は今後も日本語教育学の研究や教育にも力を注ぐ所存であり、来年度もこのようなフォーラムを開催したいと考えています。